

# 古典文法トレーニング 長文課題 品詞分解と現代語訳

## 大問十五（出典：『平治物語』）

◎品詞分解（名詞は基本的に非表示。非活用語は基本的に初出のみ。同色の助詞は同内容を示す。）

さる程に兵衛佐頼朝、伊豆の国蛭小島へ流さるべしと定めらる。池殿、頼朝を近く呼び寄せて、姿をつくづくと見たまひて、げに家盛が姿に少しも違はず。あはれ都の辺に置きて、家盛が形見に常に呼び寄せて見たまひて。遙々と伊豆の国まで下さむことこそうたてけれ。わ殿をば家盛と思ひ、春秋の衣裳は一年に二度下すべし。尼をば母と思ひ、空しくなりたらば後世をも弔ふべし。「流され人の思ふやうに振る舞ふ」(※1)とて、国人に訴へられ、二度憂き目を見るべからずと宣へば、兵衛佐殿畏まつて、「いかでさやうの振る舞ひ仕り候ふべき。髪をも切り、父の後生をも弔はばやとこそ存じて候へ」と申されければ、「よく申すものかな」とて、池殿涙を流したまひ、「疾く疾く」と宣へば、御前を出でられる。

※1…テキストでは割愛されているが、この箇所直前では次のような事情が語られている。

「また伊豆国は鹿多き所にて、常に国人寄り合ひて狩する所にてあんなるぞ。人と寄り合ひ狩などして、」  
（また伊豆国は鹿の多い所で、いつも土地の人間が寄り集まって狩りをする土地柄と聞いている。人と寄り集まって狩猟に興じて、）

◎現代語訳（↓『ステップアップノート30 古典文法トレーニング』参照）